行き行き(四段・用)て駿河(するが)の国に**至り**(四段・用)ぬ(完了「ぬ」終)。宇津(うつ)の山に**至り**(四段・用)て、

わが**入らむ**(意思「む」終 サ変・体)と**する**(四段・未)道は、いと暗う細きに(形容・ク・体)、蔦(つた)・楓(かへで)は

茂り(形容・ク・用)、もの心細く、すずろなるめを**見る**(上一・体)ことと**思ふ**(四段・体)

に、修行者(すぎやうざ)**会ひ**(四段・用)たり(完了「たり」終)。

「かかる道はいかでか(係助)**いまする**(サ変・体)。」

と**言ふ**(四段・体)を**見れ**(上一・已)ば、**見し**(過去「き」体)人なりけり(過去「けり」終)。京に、その人の御

もとにとて、文**書き**(四段・用)て**つく**(下二・終)。

駿河なる(存在「なり」体) 宇津の山べの うつつにも

夢にも人に **あはぬ**(打消「ず」体)なりけり(詠嘆「けり」終)

富士の山を**見れ**(上一・已)ば、五月のつごもりに雪いと白う**降れ**(四段・已)

り(存続「り」終)。

時**知らぬ**(四段・未)(打消「ず」体) 山は富士の嶺(ね) いつとてか(係助)

鹿(か)の子まだらに 雪の**降る**(四段・終)らむ(現在の推量「らむ」体)

その山は、ここに**たとへ**(下二・未)ば、比叡の山を二十(はたち)ばかり

重ね上げ(下二・用)たらむ(完了「たり」未)ほどして、なりは塩尻(しほじり)のやうになむ(係助)

あり(ラ変・用)ける(過去「けり」体)。

さらに進んで行き、駿河の国に着いた。宇都の山に着いて、

自分が入ろうとする道は、たいへん暗くて細くて、

蔦や楓が茂って、心細く、思いがけない目に遭うことだと思っていると、

修行者に会った。

「このような道にどうしていらっしゃるのですか。」

と言うのを見ると、(以前)見たことのある人であった。都にいる、(恋しい)人のもとに、と思って手紙を書いて(その修行者に)託した。

駿河にある宇津の山の名前のように現実にもあなたに会うことはできないし、夢の中でもあなたに会わないことですよ

富士の山を見ると、五月の下旬だというのに雪がたいへん白く降っていた。

季節を知らない山は富士山である。(今を)いつだと思って、(小鹿のまだら模様のように)雪が降っているのだろうか

その山は、都に例えると、比叡山を二十ほど重ね上げたよう(な高さ)で形は塩尻のようであった。

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/